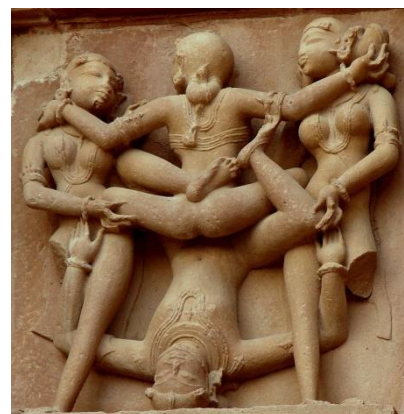


(2016年5月24日～28日)

今回は、前回泊り残した土佐・竜串海岸の先にある叶崎観音堂に泊まって一晩中観音菩薩と“同行（衾）二人”で通夜をすることを最大の楽しみとして旅立った。しかし、このような下司な目論見で観音堂に泊まらせて頂くということは、やはり仏の道に背くことになったのであろう、1週間ほどの遍路道中を殆ど雨に降られて歩く羽目と相なった。

インド仏教には、カーマストラという有り難い経典があって、精神の解脱にはソノ道の愉悦と解放が欠かせないという実にうまく出来たお経であるが、我が邦には左様な教理は無いのか。嗚呼。

(右の仏像は、インド/カンダーリヤ・ハマディーヴァ寺院のカーマストラに基づくミトゥナ合体像)



【5月24日】岡山県井原市～しまなみ海道～今治～松山～宇和島～宿毛～土佐清水市街

この2月の亡母の死去に伴い、ここ10年間以上閉め切っている実家の仏壇を拙宅に引っ越させるために、古い位牌を実家の菩提寺に持って行って魂を抜いて貰って繰り出し位牌に納めて頂くよう住職にお願いしたり、繰り出し位牌を井原の仏具屋に注文したりして、前日泊まった井原から福山に出て、福山から「しまなみ海道」をバスで渡って今治に上陸、JRとバスを乗り継いで今回の遍路の起点となる土佐清水の町に宿をとった。今回の土佐から伊予に入る遍路道は、四国でも一番の南西端に位置していて、本州からは一番遠い場所である。宇和島までは本数は少ないながらJRが通じているが、そこから先は不便なバスだけが頼りで、宇和島から土佐清水までバスを2本乗り継いで4時間も掛かった。井原を出たのが朝の6時、土佐清水に着いたのが夕方6時、直線距離にすれば、たったの200kmの距離が12時間掛かった計算になる。

さて、土佐清水では泊まる宿の手配は何もしていなかったもので、つつい前回泊まった「旅館・清龍」に今回も泊まったが、ここは設備が古い旅館で、クーラーを掛ければ大騒音で夜も寝られず、おまけに蚊の大群に襲われて全く往生した。最悪。

今晚の夜遍路は、旅館のオヤジが推薦してくれた港近くの居酒屋に行った。ここは家族経営の落ち着いた店で、お値段も安くて結構であった。「魚田^{うおでん}」。ジョッキ2杯、カキフライ、厚焼き卵で1800円。

帰途、もう一軒、昨年も行っておカミさんがなかなか感じがよろしくて話題も気品と知性に富み、お接待料金にもしてくれた店（清龍旅館の隣、店名は「みよし」？）にも寄ってみたが、中の灯りは点いているのに閉まっていた。残念至極。



【5月25日 終日雨】土佐清水～竜串海岸～叶岬

早朝から土砂降りとなった。とても歩ける状態ではなかったが、旅館で雨宿りをしていても始まらないので、とりあえず、竜串海岸までバスで行くことにした。竜串海岸は、日本列島の創成期である約2,000～1,500万年前に交互に堆積した砂岩と泥岩の地層が海蝕と風蝕作用により削られて特異な奇岩風景を

生み出した景観で名高い。竜串海岸では、足摺海洋館という水族館と、その近くにある足摺海底館を見学した。



(竜串海岸の奇岩)



(海底館)

雨はまだ土砂降りであったので、海洋館のレストランでビールを飲みつつ小止みになるのを待って、歩き始めた。足摺岬から次の札所の宿毛の延光寺に巡拝する遍路道は、東の海岸沿いに下ノ加江まで打ち戻って山越えの三原村経由で宿毛に入る東回りルートと、土佐清水から西海岸沿いに宿毛に抜ける西回りルートの2本のルートが昔からの不文律であった。後者は前者よりも2日程余分に掛かるので、今は通る遍路が少ない。今回もこの西回りの遍路道では遍路には一人も遭わなかった。しかし、前者の三原村の山中よりも、竜串海岸をはじめとする断崖絶壁の海岸線を辿る後者のルートの方が景観に恵まれている。

さて、竜串海岸から海岸道路を3～4時間歩いて、今晚の野宿場所である叶崎の観音堂に着いた。叶崎というのは叶崎灯台や黒潮展望台がある小さな岬で、岬の頂上に観音堂があった。

ここは集落からかなり離れた断崖絶壁の上で、ちょっと寂しい場所であった。折からの雨が煙り、幽霊かお化けでも出そうな雰囲気。

しかし、お堂の中は素晴らしかった。20畳ほどの畳敷きの堂内は綺麗に掃除されていて、在所の

人々の信仰心が篤いことを窺わせた。このようなお堂に泊まるには、お堂を管理されている信者総代の方の許可を得るのが常識ではあるが、集落からは遥か離れているし、人影も全く見られなかったので許可を取ることもできず、無断で泊めて貰うことにした。

このような大雨の中では、お参りに来る人もいないであろうが、般若湯を頂戴しているところをお参りに来た誰かに見られても具合がよろしくないなので、夕方3時間ほどを観世音菩薩を拝むふりをしてジ〜ットとお堂に座っていたが、これは苦行以外の何物でもなかった。やっと暗くなってきたので、いくら何でももうお参りに来る人はいないであろうと、菩薩サマにも途中で買っておいだ缶ビールと弁当をお供えて、そのご相伴に預かった。





ご本尊は十一面観世音菩薩。ご真言、**おん まか じゃろにカ ソワカ**。意識は「大いなる(マカ)慈しみと憐みの御心(じゃろにカ)を与えて下さりませ(ソワカ)とお願い申し上げ奉ります(おん)」。

十一面観世音菩薩は、本地垂迹説によれば、九頭龍の伊邪那美^{いざなみ}の命や天照大神もこの菩薩が神様の世界に出張して兼務しているようで、また、不動明王の憤怒のお姿もこの菩薩の化身でもあるらしい。十一面とは、そのような種々なお姿に垂迹した観音菩薩の化身の相を十一面に顕したものである。

また曰く。暴れまわり、疫病を広め、人身御供を要求した象頭の魔神ヴィナーヤカ(毘那夜迦)に苦しめられていた人々を救うために、観音菩薩は十一面観音に化身して降臨し、この魔神を鎮めるため象頭の女神に変化して抱擁・交合し合い、なおかつ相手の足を踏みつける事で調伏したという。毘那夜迦神と十一面観音が抱き合った男女神が「歓喜天」である。話が“カーマストラの世界”になってきた。これ以上踏み込むと、我が属する山の会「山なかまシリウス」のモットー『気品と知性』を汚すことになろうから、ややこしい性典の教義はこの辺で止めることにして、以下の宗教ゲイジュツでも鑑賞して頂くこととしよう。この夜は、この観音堂で般若湯を頂戴し、十一面観世音菩薩サマと抱っこして寝ンネしたのであった。一晩中、叶崎の断崖絶壁に打ち付ける太平洋の波頭の音が絶えなかった。



(こうなると、思惟の深淵から
そこはかとなない色香が立ち昇る)

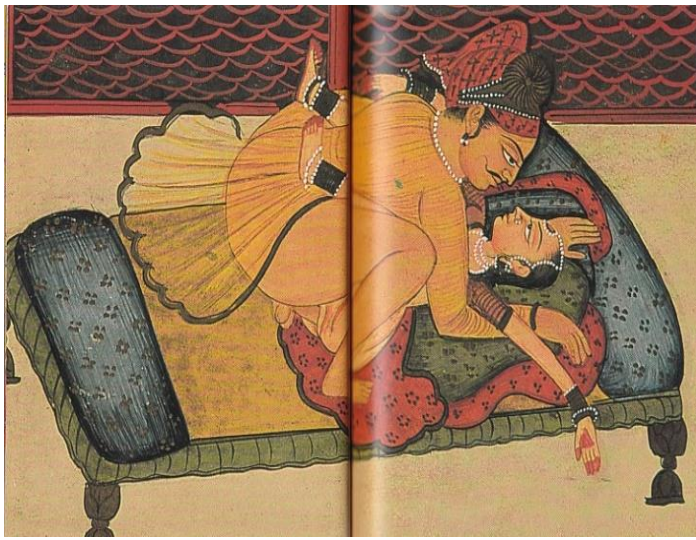


(ガネーシャ歓喜天)

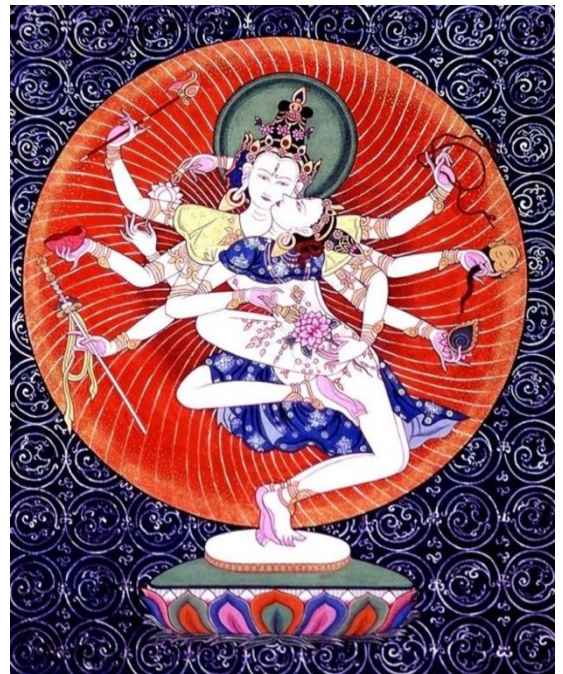
←絹本着色十一面観音像

奈良国立博物館蔵

(平安時代、国宝)



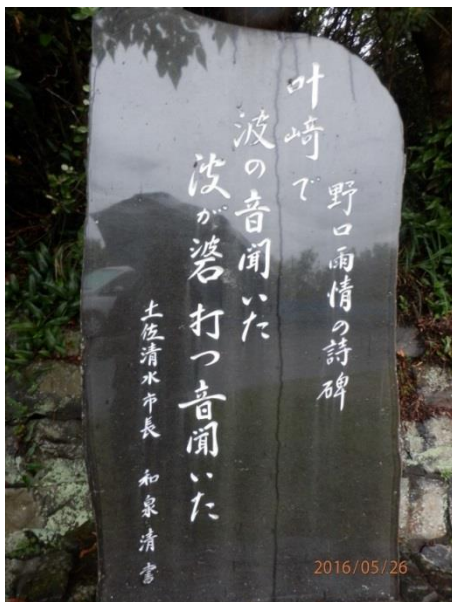
(カーマストラ)



(蓮ヤブユム歓喜天、チベット)



(足摺宇和海国立公園の碑、叶崎。足下は太平洋の断崖絶壁)



(叶崎 黒潮展望台)

- 7:35 清水プラザ・バス乗車、7:50 竜串下車、海洋館、海底館見学、11:00 行脚開始、途中「軽食アシベ」にて昼食（お好み焼き&缶ビール、800 円）、15:00 叶崎観音堂
- 本日の遍路距離 21km
- 叶崎観音堂 窓あり密閉型で清潔・快適、20 畳敷。境内に水道、下の広場にトイレあり。

【5月26日 終日雨】叶岬～宿毛～39 番延光寺往復～宿毛

本降りになったり、小止みになったり、降り方が気儘な五月雨に惑わされて叶崎黒潮展望台の四阿で1時間ばかり雨宿りするも埒が明かず。吹き降りの中を意を決めて飛び出し、叶崎から海岸道路を半時間ほど先に歩いて土佐清水市から幡多郡大月町に入った小才角^{こさいつの}という小さな漁港に至ると、「ふれあいパーク大月行」（道の駅「大月」行）というバスが停まっているではないか！ 雨脚は強まる一方だし、ヨシッ、これに乗ってやれ。今日歩く予定であった足摺岬からの西回り遍路道は、ここから更に海岸沿いに歩いて古来より月夜見信仰で有名な月山神社経由で宿毛に入るルートであるが、バス道路はこの先の大浦という漁港から国道 321 号で山中を超えて大月経由で宿毛に抜けるルートとなっている。雨に煙る太平洋の荒波は竜串海岸や叶崎でも堪能したので、もう充分としよう。

運転手さんの話では、このバスは大月止まりであるが、大月から「くろしお鉄道」宿毛駅行のバスが直ぐに連絡しているので、それに乗り換えて宿毛まで行ったらどうかとの有り難いお言葉。それを聞いて一気に軟弱になってしまった。バスは、歩いてたっぷり 1 日掛かる 30km の^{みちのり}道程を 1 時間で宿毛駅まで運んでくれた。時にまだ午前 8 時半。



（小才角の集落）

さて、どうするか。歩き遍路でも、一旦乗り物に乗ると一気に軟弱化してしまって、その日は歩く気にならなくなってしまうものだ。本日も然り。宿毛駅から次の札所 39 番延光寺までは歩きでも往復 5 間ほどの距離であるから、歩いても何ということもないのであるが、ザックを宿毛駅のロッカーに預けて手ぶらでバスに乗ってしまった。巡拝の帰途、くろしお鉄道平田駅で雨宿りを兼ねて近くのコンビニで買った缶ビールと天井で昼飯を喰い、そのまま電車で宿毛駅に戻った。

空模様は、相変わらず本降りになったり、小止みになったり。時々小止みになって薄日も射すような塩梅なので、本日の野宿予定場所である「道の駅すくも」の遍路小屋に泊まろうか、いやいやこの吹き降りでは壁が無い遍路小屋は雨を防ぐ術がないかも・・・などと空を見上げながら午後一杯の時間を逡巡に明け暮れた。2 回目の順礼はオール野宿と決めていたので、野宿の方針は守りたし、さはありながら雨に打たれて寝るのも痛しで、全く修業が足りんワイ。

「道の駅すくも」の遍路小屋というのは、宿毛湾のどんづまりにある道の駅「サニーサイドパーク」に復元された『浜田の泊屋』で、その二階からは冬季には海に沈む「達磨夕日」が眺められるので有名である。「泊屋」とは、大正時代頃まで日本各地にあった「若衆宿」で、少年期から青年期に移行する際の種々の通過儀礼や教育が先輩若者の手で行われた小屋であり、男女のナニの手ほどきも行われたそうだ。特に、宿毛地方には泊屋が多



（『浜田の泊屋』）

かったらしく明治時代の頃までは200ヶ所を数えたという。その後は風紀上の問題多しとして廃止されたり、集会所に衣替えされたが、今でも何軒かは保存されていて、特に延光寺近くにある「浜田の泊屋」（前ページ写真）は国指定重要有形民俗文化財として保存されている。宿毛の道の駅にある遍路小屋は、この浜田の泊屋を復元したもの。四国の遍路小屋はほぼ全てが歌先生（遍路小屋の設計者）の珍奇な(?)掘っ建て小屋で味も素っ気も無いが、たまにはこのような風情がある小屋も見られる。このような遍路小屋は、地元の皆さんの地元文化伝承への熱意と熱心なお接待（奉仕活動）の精神によるものである。



←「道の駅すくも」に復元された遍路小屋
『浜田の泊屋』

↓宿毛湾に沈む達磨夕日



さて、いつまで空を見上げていても限がない。この遍路小屋の二階に風雨が吹き込んでいるか否かを見極めてみてから決めようと、道の駅行のバスに飛び乗ってみたのであるが、その途端にまたまた風雨が強まり、一旦軟弱化した精神は今晚の宿も軟弱を求めているようで、発車する前に飛び降りてしまった。宿毛駅の観光案内所で宿を紹介して貰った。駅から多少離れているが、嬉しいことに2500円のビジネスホテルであった。部屋は若干狭かったが、インバス、イントイレ。ベッドも風呂もトイレも清潔で気持良かった。対応も良し。おまけに洗濯機も乾燥機もたった100円で使い放題。一般の宿なら、ズボンなどを洗濯して乾燥させるには500円でも足りないくらいの時間が掛かる。

今晚の夜遍路は、ホテル推薦の近くの「まるせん」。ナマ中4杯+菜3品で3,900円。マアマア。



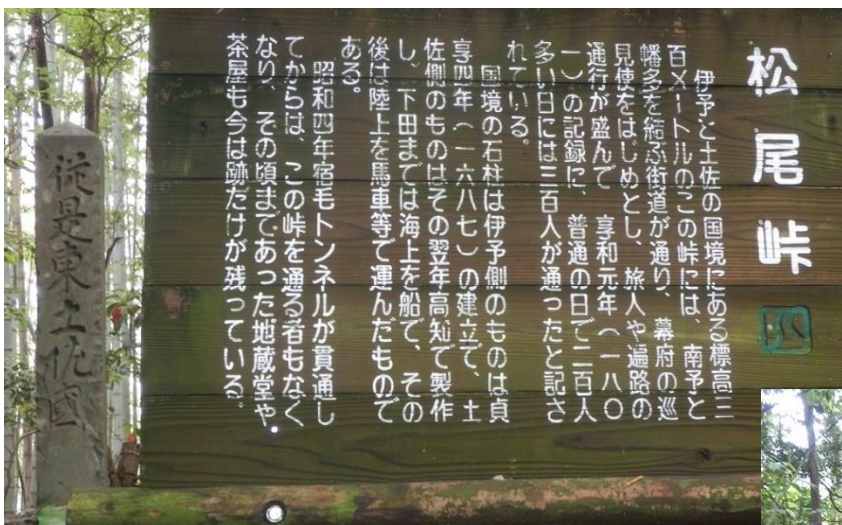
- 6:00 叶崎観音堂発、1時間黒潮展望台で雨宿り、7:20 小才角
バス乗車、8:20 宿毛駅着、延光寺順礼往復、宿毛駅帰着12時。
- 本日の順礼距離 50km(内、歩僅か5km)
- ホテル 宿毛フレックスホテル(2500円)非常に結構

【5月27日 曇、後薄日】宿毛～松尾峠～一本松～国道～国道56号経由～愛南町御荘40番観自在寺

天気はイマイチで今にも雨が降りそうな曇天。コンビニでコーヒー。今日は、土佐から伊予に入る日。これから越える土佐・伊予の国境が松尾峠で、この峠は古くから伊予・宇和島方面から土佐・幡多への入り口であった。かつて、土佐は南国故真冬でも野宿できたので所謂乞食遍路の群れが大挙して土佐に潜り込み治安悪化を齎したので、業を煮やした土佐藩では土佐へ入る遍路を国境で厳しく取り締まった。伊予から土佐に入る遍路道はこの松尾峠だけに限られ、しかも通行が許されるのは十分な路銀を持っている者に限られ、乞食遍路は通行を許されなかった。このような乞食遍路は、行き倒れになるのが常であったからそのまま道端に捨て置かれたが、藩の役人は自国領内には置いておきたくなかったので、行倒れを少し引きずって隣藩の境を越えた場所まで蹴り込んで捨てたという。

江戸時代の四国遍路案内記である宥辨真念の「四國徧禮道指南」にも、「大ふか原村番所有 土佐通路の切手はこれへわたす 此松尾坂峠 土豫のさかひ標石有 云々」とある。“大ふか原村”とは現在の宿毛市大深浦。ここに番所があって、土佐・伊豫両国の標石があり、通行手形を改めたと書かれている。一方、松尾峠の伊予側の小山村にも番所があって、ここでも通行手形を改めた。同書に曰く「こやま村 番所切手を改る」。

さて、宿毛市街から直ぐに松尾峠への山道になった。のっけから踏み跡程度の急坂。稜線からは時々宿毛湾が眺められた。錦、小深浦、大深浦などという宿毛市街のすぐ裏山にありながら、平家落人集落のような山間の小集落を越えて登って行くと、やがて息も切れそうな急坂となって松尾峠に出た。今は通る人も無く、ちょっと陰気臭い場所でもあった。下の写真のような両国の境標が残っていた。



松尾峠を下って伊予の国に入った所で、昨夜の同じホテルに泊まっていたイギリスの若者男女ペアに遭った。足が速いですねというから、ワタシもう 73 歳ヨと言ったら、とてもそんな歳にはみえません、50 歳くらいかと思いましたとお世辞がお上手なこと。彼らに、日本語も読めないのにどうやって日本人でもわからないようなこんな地図も無い山道を間違えずに歩けるのかと聞いてみたら、ちゃんと英語版の遍路地図を持っていた。また、仲間同士でスマホなどで詳細な情報をやり取りしているので、道が分からなくなったら経緯度を付けて聞いてみるのだそう。ナルホド、そういえば最近では外人遍路が大変増えてきている。特に欧米人の歩き遍路が多い。

英語版の遍路地図と言っても、それほど詳細な地図ではないし、また山中の案内板にはローマ字表記の案内板は無いのに、なぜ行き先を間違えずに歩けるのか？ 実は英語版の地図には主要な地名は漢字表記も載っていて、案内板の漢字と地図の漢字を文字の“形”で見分けるのだそう。

さて、上の「四國徧禮道指南」の「こやま村 番所切手を改る」という小山村（今の愛南町）には右のような立派な石碑が建っていた。従是西伊豫國宇和嶋領。近くに建っていた案内板によれば、この地は伊予・土佐往還の中でも大変重要な場所で、代々宇和島城の能吏が駐在する第一級の役所があったそうだ。今は山村の田園風景。



さてさて、『修業の道場』土佐ノ国 16 札所を打ち終えていよいよ『菩提の道場』伊予ノ国第一番札所の 40 番観自在寺に納経ギリギリの 17 時直前に到着。いかにも苦行遍路をしているかのような顔をして、通夜堂宿泊のお願いをしたところ、アッサリとご裁可を下されて、おまけに食事（呑み屋？）ならどこそこに某々という良い店があると店の紹介までしてくれた。しかも、嬉しいことに、ここの通夜堂は独立した建物で、清潔な板張りに天井ベッドまで設えられていた。誠に結構な通夜堂であった。叶崎の観音堂や四万十大橋の太子堂のように仏像が祀られていないのも緊張がなくてこれまた結構。



（版画家 畦地梅太郎作 観自在寺⇒）

（翌日の項参照） 21 観自在寺 1939年 240×330

『御荘風景』全3点のうち1点

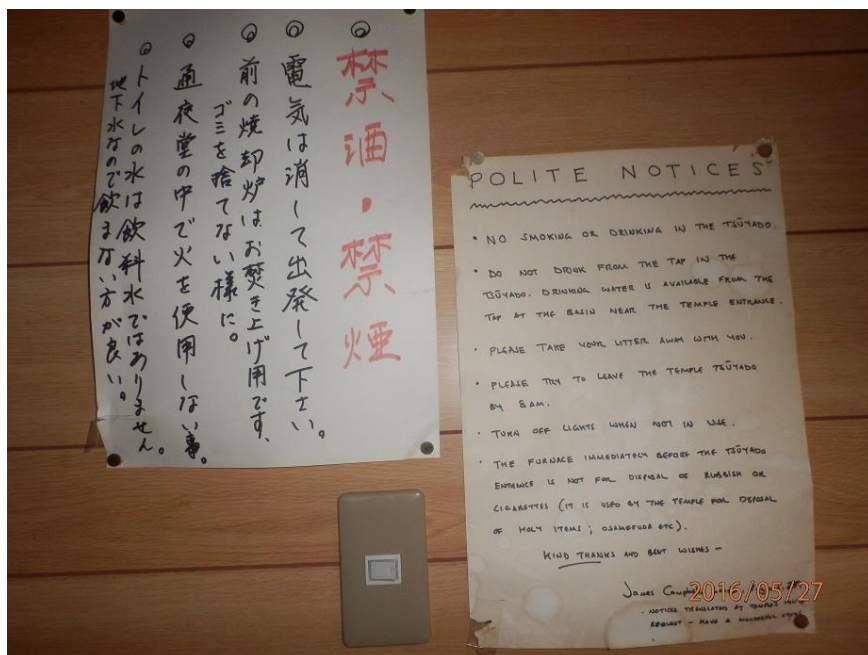
今晚の夜遍路は、お寺の僧侶が教えてくれた和風食堂「なにわ」に行ってみた。ここの名物というウツボの唐揚げなるものを喰ってみたがド〜てことはなかったし、話し相手も居ない食堂風では興趣も湧かなかった。早々に退散、帰途門前で見かけた赤提灯「遊遊」という居酒屋に入った。ここ愛南町御荘という町は、観自在寺の門前町であり、また鎌倉時代の昔から延暦寺の荘園になっていて豊かな郷であったそうであるが、田舎のご多聞に漏れず今はシャッター街になっていて、夜の街にも全く人通りが無く灯りも点いていなかった。赤提灯が灯っているのはこの店だけで、しかも客は小生だけであったから、女将と話が弾んだ。



(奥の建物がトイレと倉庫と通夜堂)



(天井ベッドを合わせると
5人は寝られる広さ)



(パツとした赤提灯「遊遊」)



(パツとしなかった「なにわ」)

- 7:00 ホテル発、ローソンにて朝食 8:00 発、10:30 松尾峠、12:15 一本松ローソン昼食 (ビール1本) 12:50 発、16:45 観自在寺着 ●本日の歩行距離 21km

- なにわ=ナマ1杯+ウツボ唐揚げ 1,600円 遊遊=ナマ4杯他 3,700円

【5月28日 終日雨】 御荘～宇和島駅～平田（道の駅「みま」）～42 番仏木寺～41 番龍光寺～
宇和島駅～遊子水荷浦（段々畑）～卯之町

本日もまた雨。泣けてくるナア～。今日は乗り物デーに徹底して2札所を回り、余った時間を宇和島近辺の観光に当てることにした。これぞ軟弱化の極みナリ。

そうと決まれば、早朝一番のバスで宇和島に出るに越したことはないので、6時のバスに乗って早くも7時半には宇和島駅に着いた。宇和島駅からは日に3本ほどしかない超ローカル線のJR予土線で20分程の「^{むでん}務田」駅まで行って、まずは近くの道の駅「みま」に開設されている畦地梅太郎記念美術館を見学した。畦地梅太郎は、ここ三間の出身で山や山男などを得意とした版画家である。この美術館には、同じくこの出身のキセキ農機の創始者・井関邦三郎という人の記念館も併設されていて、こちらにはトラクターなどの農機具が陳列されていた。



（雨に煙る道の駅「みま」）



←畦地梅太郎の復元アトリエ

畦地梅太郎は、棟方志功ほど有名な版画家ではないが、山の愛好者には懐かしい版画家で、かつての山の文芸誌「アルプ」や山岳雑誌「岳人」の表紙を飾ったので、記憶されている方々も多いと思う。特に「山男シリーズ」が圧巻であった。



（「山に叫ぶ（二）」1956年）



（「山男（三）」1956年）



（「鳥のよぶ声」1968年）

道の駅からは、雨の中を1里ほど歩いて仏木寺に巡拝し、打ち戻って龍光寺に寄ってからバスで宇和島に戻った。当初の計画では、この日の泊まりはこの道の駅の軒下の予定であったが、道の駅が閉店するまでの午後一杯をここで時間潰しする訳にもいかず、また、吹き降りを避けられるような軒下も見当

たらなかったの、今晚の宿は次の札所 43 番「明石寺」がある卯之町まで行って、その旅館にでも泊まることとして、残った時間は以前から行って見たかった宇和島名所の段々畑「遊子水荷浦の段畑」を見学することにした。宇和島駅から宇和島湾沿いにバスで片道 1 時間。

遊子水荷浦の段畑は、宇和海のリアス式海岸の急斜面に開墾された段々畑で、近世から現代まで代々にわたって営まれ続けてきた半農半漁の面影を今に伝えている。国指定「重要文化的景観」。猫の額ほどの段々畑ではジャガイモの栽培が盛んで、ジャガイモ焼酎「段酌」が名産品となっているらしい。沖の宇和島湾には幾何学模様の養殖筏が無数に浮かんでいた。



(遊子水荷浦 段畑。雨で写真が撮れなかったの、他より引用)



(遊子水荷浦沖の宇和島湾に浮かぶ養殖筏)

卯之町では、前回も泊まった「まつちや旅館」に泊まった(素泊まりで 4,500 円、優)。卯之町での夜遍路は、何某の「釣りときどきお遍路」とかいふ HP で紹介されていた「わらぐろ」という居酒屋が興味がありそうだったので探して行ってみた。オバサンと若いお姉さんの二人でやっている飲み屋であった。料理は手作りで美味そうであったが、独り歩きの遍路の話し相手というには舌が足らなかった。そこで、この店は生中 2 杯だけで切り上げて、前回も行った「かあーちゃま」に“話しに”寄った。話が弾んで、“かあちゃま”の「ワタシにも頂戴」の盃も進んだらしく、結構な酒代になった。

またまた、酒場詩人&酒場ライター・吉田類の「酒場放浪記」モドキになってきた。夜の酒場の話し相手が必要なようでは修業が足らん。比叡山の千日回峰ではないが、五十日無言遍路でもしたら如何か。



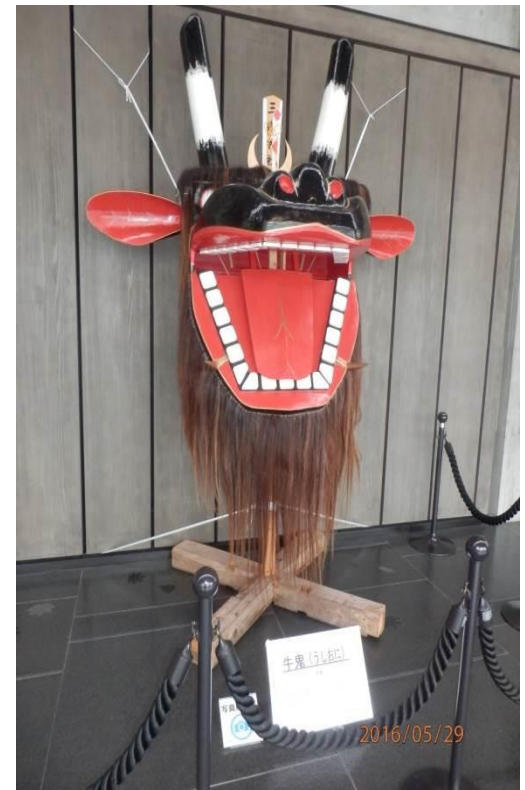
- 本日の遍路距離 100km (内、歩 8km)
- 「わらぐろ」生中 2 杯他 1,800 円
- 「かあ〜ちゃま」4,800 円

「わらぐろ」とは、これのこと⇒

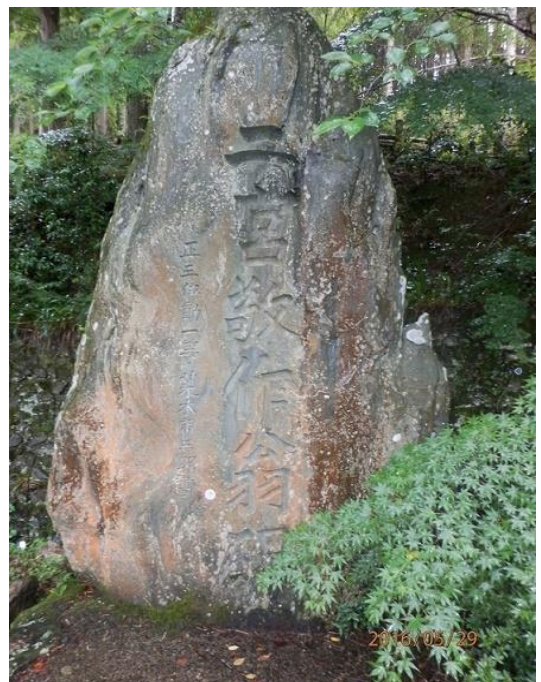


【5月29日 雨】 卯之町～43番「明石寺」～卯之町～帰宅

明石寺の帰りに、途中にある愛媛県立歴史文化博物館に寄ってみた。たまたま「愛媛・お祭り博覧会 2016」という企画展をやっていたので、65歳以上半額 280 円ナリで嬉しく拝観した。



卯之町は蘭学医・二宮啓作の出身地であることは第1回目の遍路紀行にも記したが、博物館から山道を下った所に碑石があり、説明板には下記のような文言があった。





明石寺が終わった後、前回詣り残した大洲の第7番札所「金山出石寺」を続けて巡拝したかったのであるが、これからの2、3日間も続けて大雨の予報であったので、全くの山中の遍路道を1日中歩かなければならない金山出石寺は次の機会に譲って、今回は卯之町迄で打ち切って帰宅した。

岡山で途中下車して、岡山大学病院で24時間にわたる開頭手術を受けて入院中のモリヤーノを見舞った。意外に元気だったのに安心した。

●本日の遍路距離＝歩僅か6km。

(その5 了)

「四国遍路野宿ノ記」目次に戻るには、画面最上段最左端の戻るボタン



で戻って下さい